舎利弗の外道調伏譚に関する試論

岡本健資

序

仏典においては，同じ筋書を持つ説話が複数伝承される場合が少なくない。それらは，筋書を等しくしながらも，編纂された時代や地域そして伝承した部派の違いなどに影響を受けつつ，少しずつ相互に異なる説話になっていく。仏教説話が，その伝承の過程でいかなる変容を引き起こし得るのか。それを考える手がかりとして，本稿では，祇園精舎の建立をめぐる説話に注目したい。

一般に，祇園精舎建立譚としてよく知られるのは下記であろう。

ある時，須達（スダッタ）すなわち給孤独（アナータピンダダ）長者が，マガダ国で釈尊と出会い帰依するにいたった。給孤独長者は，自らの根拠地であるコーサラ国舎衛城（シュラーヴァスティー）に釈尊を招くために，舎衛城に精舎を建立することを釈尊に宣言して帰国した。帰国した長者は，コーサラ国のジェータ王子の園林（ジェータヴァナ）が精舎建立に相応しいと判断し，譲ってくれるよう請願する。しかし，王子はその願いを聞き入れなかった。様々ないきさつで，王子は，金貨を敷き詰める分だけの土地を長者に譲ることを承諾する。長者は自らの金貨を次々に運び込み，ジェータヴァナに敷き詰めはじめる。この話を聞いたジェータ王子は，長者の行動から釈尊の偉大さを推し量り，長者と協力し，ともに釈尊にジェータヴァナを布施することを申し出る。

上記は，「祇園布施」とも呼ばれる仏伝中の有名な事績であり，パーリ・

ヴィナヤやジャータカ・ニダーナカター，阿含経などの文献資料に現れるだけでなく，古代初期美術ではバールフットのストゥーパ欄楯浮彫（前1世紀頃）にも見出される。しかし，給孤独長者とジェータ王子の協力関係が確定した時から実際に祇園精舎が建立されるまでの間に何が起こったかを説明する話も存在する。祇園精舎の建立の是非をめぐる，舎衛城の外道たちと仏弟子シャーリプトラ[1]（以下，舎利弗と記す）との闘争を語る話である。この話を本稿では便宜的に「舎利弗の外道調伏譚」と呼ぶことにする。

この「舎利弗の外道調伏譚」は，6世紀以降，特に9世紀から10世紀に造営された敦煌石窟の壁画の題材として頻繁に採用されることから，秋山光和氏の『平安時代世俗画の研究』（東京:吉川弘文館，1964年），V. H. Mair氏による "Śāriputra Defeats the Six Heterodox Masters: Oral-Visual Aspects of an Illustrated Transformation Scroll (P4524)"（*Asia Major* 8），またS. E. Fraser氏の*Perfoming the Visual*（Stanford, California: Stanford University Press, 2004）など，主に敦煌美術を対象とした研究において関心を集めてきた。上記の研究者たちは，これらの壁画群を描くための素材となった文献資料として，敦煌文献『降魔変文』（9世紀後半(？)）とその基礎となったとされる『賢愚経』「須達起精舎品」（445年訳；以下，「起精舎品」と略す）を挙げ，時に漢訳『根本説一切有部毘奈耶破僧事』や『衆許摩訶帝経』までを用いて検討してきた。しかし，それら有部系律文献群と内容的に一致するサンスクリット文献（*Saṅghabhedavastu* [以下，SBhvと略す]，*Śayanāsanavastu* [以下，ŚĀvと略す]）まで遡った詳細な検討は，管見の及ぶ限りなされていない。

そこで本稿では，この「舎利弗の外道調伏譚」を記載する「起精舎品」の記述と，上記サンスクリット文献との間に存在する異同を明らかにし，その差異について考えてみたい。

使用する資料

「舎利弗の外道調伏譚」を扱う敦煌壁画とその素材となった「起精舎品」

は，敦煌を含めた中央アジアという地域に属する資料である。従って，地域差に留意し，インド成立の可能性が高いものをまとめて資料群と【A】[(2)]と呼び，「起精舎品」と区別する。

舎利弗の外道調伏譚を記す資料

・『賢愚経』巻第十「須達起精舎品」[慧覚等訳445年. T. 4. no. 202, pp. 418b-421b]

資料群【A】

・*Saṅghabhedavastu* [edited by R. Gnoli. 1977. vol. I, p. 173, l. 8- p. 178, l. 12]
・*Śayanāsanavastu* [edited by R. Gnoli. 1978. p. 20, l. 15- p. 24, l. 28]
・『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第八 [義浄訳700-711年. T. 24. no. 1450, pp. 140a-141b]
・『衆許摩訶帝経』巻第十二 [法賢訳985-994年(?). T. 3. no. 191, pp. 967c-968c]

1．舎利弗の外道調伏譚の比較

ここでは，まず「舎利弗の外道調伏譚」の筋書の中で，【A】と「起精舎品」との大きく相違する部分を取り出し，その違いを確認することで，「起精舎品」の特徴を見る。

① 敵対者

「祇園布施」の話に見られる通り，給孤独長者はジェータ王子の協力を得て，ジェータヴァナを精舎建立予定地とするが，このことを知った舎衛城の外道たちは精舎建立に反対の意思を示す。彼らの「反対の意思表明」につい

ては，資料群【A】と「起精舎品」の記述にさほどの違いはない。そこで，ŚĀvを引用し筋書を確認する。

ŚĀv: 激しい怒りで心を満たした彼ら外道（tīrthya）たちは，大挙して給孤独長者のところに近づいた。近づくと，〔彼らは〕言った。「長者よ，お前は沙門ガウタマのために，ここに精舎を建立すべきではない。なぜなら，私たちによって〔それらジェータヴァナにある〕諸々の村落は分配済みだからだ。[3] 沙門ガウタマには王舎城がある。舎衛城は私たちのものだ。[4]」

これに対して，給孤独長者は「あなた方によって，諸々の村落は分配済みでしょうが，〔この土地は〕私自身の所有物です（madīyaṃ svāpateyam）。私は，〔自らが〕帰依した御方の法の基盤〔となる建物〕（dharmaskandha）を建立したいのです。」と[5]反論する。そこで，外道たちは王のもとに行くが，そこでも給孤独に負けてしまう。[6] 外道たちは精舎建立に反対する姿勢を変えず，次のように，舎利弗に闘いを挑むことから舎利弗と外道たちの闘争が始まる。

ŚĀv: 無礼な外道たちは，主張を翻さず言った。「長者よ，お前の思い通りにはさせない。沙門ガウタマの高弟がやって来ているな。彼がもし我々を論戦によって（vādena）[7]うち負かしたなら，精舎を建てるがいい。」と。[8]

以上，外道たちが舎利弗に闘いを挑む場面までを【A】に属するŚĀvを引用しつつ見てきた。次に，「起精舎品」における表現を見る。

「起精舎品」： 六師聞之。往白國王。長者須達。買祇陀園。欲為置畺沙門興立精舎。聽我徒衆與共挍術。沙門得勝。便聽起立。若其不如。不

得起也。瞿曇徒衆。住王舎城。我等徒衆。當住於此。(T. 4, pp. 419c27-420a3) ※下線は筆者。

以上のように,「起精舎品」では外道たちを「六師」(T. 4, p. 419c27) と表現している。【A】は敵対者である外道たちを「tīrthyaの複数形」(tīrthyās等) あるいは, 漢訳資料において「(諸) 外道」と記していた。「起精舎品」での外道たちの初登場箇所が, 上記引用文冒頭である。そのため,「起精舎品」の敵対者は全般に亘って「六師」であることが解る。但し, この「六師」各人の固有名詞が記されないことには注意が必要である。[9]

② 「七日後」の開催

給孤独長者は, 外道たちから舎利弗に対してなされた挑戦の言葉を聞き, 舎利弗のもとへ行ってその可否を尋ねると舎利弗は, 外道たちの挑戦を受ける, と返答する。ここまでは, 資料群【A】と「起精舎品」の記述は概ね一致する。その後, 外道たちとの対決が七日後に決定されるが, 七日後開催を舎利弗が指示するのか, 外道たちが指示するのか, という点で資料群【A】と「起精舎品」とに違いが見られる。

『衆許摩訶帝経』を除く【A】は, 舎利弗が「教化されるべき人々が参集するのに七日を要する」と考え,[10] 七日後の決定を行う。『衆許摩訶帝経』も舎利弗が「根縁成熟有幾時分。(機が熟するのがいつなのか〔観察して〕)」と記し, 七日後の会見を指示したとする。[10] 一方,「起精舎品」では六師が七日後を宣言したことになっている。しかし, 六師が七日後とした理由については記述が無い。

ŚĀv:「どれほどの期間で, 彼ら (教化されるべき人々) は集まってくるだろうか」〔と考え,〕「七日後である」と知った。〔以上の様に〕心を集中し終えて, 彼 (舎利弗) は「長者よ, そのようにせよ。しかし, 七日目においてである」と語った。[12]

「起精舍品」：是時六師。宣語國人。卻後七日。當於城外寬博之處。與沙門挍。(T. 4, p. 420a20-21)

③ 協力者探索

【A】では，七日後の会見の理由を不審に思った外道たちは，舍利弗が味方を探していると考え，自分たちも味方の探索を始める。一方，「起精舍品」はこの記述を欠く。『衆許摩訶帝経』[09]を含め【A】では，外道たちが味方探しを行った結果，ラクタークシャ（Raktākṣa）という人物を見出す。

ŚĀv: te saṃlakṣayanti; dvābhyām atra kāraṇābhyām bhavitavyam; atha vāsau niṣpalāyitukāmaḥ; atha vā pakṣaṃ samanveṣṭukāmaḥ; kim atra prāptakālam; vayam api pakṣaṃ samanveṣāmaha iti; te pakṣaṃ samanveṣṭum ārabdhāḥ (ŚĀv. p. 21, ll. 5-9; SBhv. p. 174, ll. 2-6)[10]

彼ら（＝外道たち）は思案した。「この〔期日〕に〔会見が行われることは〕，二つの理由によりなされたに違いない。この者が逃げようとするか，あるいは，味方を探そうとするか，である。〔そうでなければ，〕この〔期日〕における〔会見が〕時機を得たものであろうか。私たちも味方を探そう」と。〔そして〕彼らは味方を探し始めた。

ŚĀv: taiḥ pakṣaṃ samanuveṣamānai raktākṣo nāma parivrājako dṛṣṭaḥ; sa tair uktaḥ: tvam asmākaṃ sabrahmacārī; śramaṇasya gautamasyāgraśrāvako 'smābhir vādenāhūtaḥ; sa pakṣaṃ samanveṣate; tvam asmākaṃ sāhāyyaṃ kalpaya; kiyatā kālena? itaḥ saptame divase; śobhanam, evaṃ bhavatu; yadā yuṣmākaṃ sannipāto bhavati tadā mamārocayitavyam (ŚĀv. p. 21, ll. 9-14; SBhv. p. 174, ll. 6-11)

味方を探しつつある彼ら（外道たち）は，ラクタークシャという名の托鉢行者を見つけた。彼らは，彼（ラクタークシャ）に告げた。「あなたは，私たちと同じ梵行者である。沙門ガウタマの高弟が，私たちとの論

戦のために呼び寄せられたが，彼（舎利弗）は味方を探している。あなたは私たちの仲間であると考えよ。」〔ラクタークシャは答えた。〕「如何ほどの時が過ぎてからか？」〔外道たちは答えた。〕「今から七日目である。」〔ラクタークシャは語った。〕「よろしい。そのようにしよう。あなたがたの集合時に私を呼べ。」

「起精舎品」でもラクタークシャにあたる「勢度差」（Raudrākṣa(?)）が現れるが，詳しい経緯は記述されず，闘争の場において外道の弟子の１人として登場し，唐突の感がある。

「起精舎品」：六師衆中。有一弟子。名勢度差。善知幻術。（T. 4, p. 420b14-15）

④ 神通力対決の内容

外道たちと舎利弗の双方が座につくと，神通力示現による対決が始まる。【A】と「起精舎品」ともにこの対戦を記す。しかし，【A】が四戦のみを記すのに対し，「起精舎品」はその四戦にさらに二戦を加えた合計「六戦」が行われたとする。その順番と示現したものを列挙すると下記となる。なお，全ての対戦において，舎利弗が勝利する。

【A】：四戦[09]

	[ラクタークシャ]		[舎利弗]
第１戦：	花をつけた樹木	—	暴風雨
第２戦：	蓮池	—	若象
第３戦：	ナーガ（七頭）	—	ガルダ
第４戦：	ヴェーターラ	—	マントラ

「起精舎品」：六戦

	[勞度差]		[舍利弗]
第1戦：	樹	—	旋嵐風
第2戦：	池	—	大六牙白象
●第3戦：	山	—	金剛力士
第4戦：	龍（十頭）	—	金翅鳥王
●第5戦：	牛	—	師子王
第6戦：	夜叉鬼	—	毘沙門王

⑤ 舍利弗の神変

【A】には見出せず「起精舍品」のみの記述である。「起精舍品」では，舍利弗が勞度差に勝利した直後，舍利弗はさらに以下の神変を行ったと記している。

「起精舍品」：時舍利弗。身昇虛空。現四威儀。行住坐臥。身上出水。身下出火。東沒西踊。西沒東踊。北沒南踊。南沒北踊。或現大身。滿虛空中。而復現小。或分一身。作百千萬億身。還合為一身。於虛空中。忽然在地。履地如水。履水如地。作是變已。還攝神足。坐其本座。(T. 4, p. 420c14-20)

⑥ 外道たちの結末

【A】では，ラクタークシャは対戦後，舍利弗へ帰依して出家受戒し阿羅漢となる。その他の外道たちは精舍の労働者（bhṛtika）となったが，内心，舍利弗の暗殺を企てていた。しかし，その企ては，舍利弗の化作した「鞭を携えた人物」(latāvārika) によって妨げられ未遂におわる。後に，彼ら外道たちも舍利弗のもとで出家受戒した後，阿羅漢となる（ŚĀv. p. 23, ll. 18-32; SBhv. p. 176, l. 22- p. 177, l. 13)。

ŚĀv: āyuṣmatā śāriputreṇa sa pravrājitaḥ upasaṃpāditaḥ; avavādo

dattaḥ, tenodyacchamānena ghaṭamānena vyāyacchamānena sarvakleśaprahāṇād arhatvaṃ sākṣātkṛtam; arhan saṃvṛttaḥ (ŚĀv. p. 22, ll. 13-15; SBhv. p. 175, ll. 14-16)

具寿シャーリプトラは，彼（＝ラクタークシャ）を出家受戒させて教誡を与えた。努力と精励，奮闘をし続ける彼（＝ラクタークシャ）は，あらゆる煩悩を放棄して阿羅漢性を現証し，阿羅漢となった。

「起精舎品」では，敗北した「勞度差」について「即時屈伏。五體投地。求哀脱命。辱心已生。」と記すだけで，仏教に帰依したことまでは記されない。六師とこれに従う者たち，三億人の弟子たちについても，出家学道したとされるのみである。

「起精舎品」：時會大衆。見其神力。咸懷歡喜。時舍利弗。即為説法。隨其本行宿福因緣。各得道跡。或得須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢者。六師徒衆。三億弟子。於舍利弗所。出家學道。按技訖已。四衆便罷。各還所止。(T. 4, p. 420c)

以上，「舎利弗の外道調伏譚」を記す資料群を，推定される成立地域によって資料群【A】と「起精舎品」（＝『賢愚経』「起精舎品」）との二つに分類して表現が比較的大きく相違する点を①から⑥において見てきた。結果，対戦者である外道たちを「六師」と呼ぶなど，「起精舎品」のみに見られる表現が含まれることを確認した。これら表現の違いの発生理由について以下に考察を行う。

2．舎衛城神変との比較

前節では【A】と「起精舎品」との相違について確認したが，ここではそれらの相違が生じた理由について考えてみる。その足がかりとして，仏伝中

の事績「舎衛城神変」[16]に注目してみたい。その内容は，プーラナを始めとする「六師外道」に闘いを挑まれた釈尊が，コーサラ国の舎衛城において神通力に基づく奇蹟を示現して彼らを調伏したとするものである。これまで見てきた「舎利弗の外道調伏譚」と共通する点が多いため，「舎衛城神変」の要素が「舎利弗の外道調伏譚」に紛れ込んでいる可能性も考えられる。また，仏伝の構成から考えても，舎衛城にて二度も外道調伏が繰り返される点からは，不自然さが否めず，そこから，両話になんらかの関係が存在することを推測させる。なお，両話の時系列としては，「舎利弗による外道調伏」が「舎衛城神変」に先行する。「舎衛城神変」の中には，既に建立された祇園精舎に釈尊が逗留する記述が見られるからである。[17]

両話は舞台と文脈がほぼ同じである。まず，「舎利弗の外道調伏譚」と「舎衛城神変」は，同じく外道調伏をテーマにしており，その発端も状況が類似する。例えば，「舎利弗の外道調伏譚」における外道たちの目的は祇園精舎建立の阻止，すなわち舎衛城への仏教教団の教線拡大を阻止することである。これに対して「舎衛城神変」の外道たちも，失った尊敬や施与を回復するために釈尊へ勝負を挑む。いずれも，仏教教団の勢力伸長を防ぐことが目的である点で一致している。

前節で見た「起精舎品」が【A】と相違する点について，「舎衛城神変」の要素が入り込んでいる可能性を視野に入れて，それら相違点が「舎衛城神変」を記す資料において見つかるか否か確認する。

「舎衛城神変」を記す文献資料の内，主要なものは下記である。これらを資料群【B】と呼ぶことにする。

資料群【B】舎衛城神変を詳述する資料

- 『賢愚経』巻二「降六師品」[T. 4. no. 202, pp. 360c-366a]
- 『法句譬喩経』「地獄品」[法炬・法立共訳290-311年. T. 4. no. 211, pp. 598c-599c]
- 『四分律』[佛陀耶舎・竺佛念訳408-413年. T. 22. no. 1428, pp. 946b-951c]

・『仏本行経』[寶雲訳424-453年. T. 4. no. 193, pp. 83c-87a]
・『根本説一切有部毘奈耶雑事』巻第二十六 [義浄訳710年. T. 24. no. 1451, pp. 329a-333c]
・*'Dul ba phran tshegs kyi gshi* [北京版no. 1035. Ne 37a8-51a2; 台北版no. 6. Da 40a1-53b5]
・*Divyāvadāna*. chap. 12. Prātihāryasūtra [edited by Cowell and Neil. 1886. pp. 143-166]
・*Dhammapada-Aṭṭhakathā*, vol. III (PTS, 1970), pp. 199-230.

《① 敵対者》

まず，前節で検討した「敵対者」について，【A】が給孤独と舎利弗の敵対者を「tīrthyaの複数形」(tīrthyās等)・「(諸) 外道」と記すのに対して，「起精舎品」では「六師」と表現する点が異なっていた。ただし，「起精舎品」では外道たちの固有名は記されず単に「六師」とされるのみであった。

【B】は全て，釈尊の敵対者をプーラナをはじめとする固有名詞をもつ「六師外道」あるいは彼らの内のいずれかとする。「起精舎品」の「六師」がプーラナたちを指していないとしても，「六師外道」を対戦者とする【B】の記述から影響を受けた可能性は否定できない。【B】の事例として，*Divyāvadāna* 第12章のPrātihāryasūtra（以下，Div-Psと略す）が六師の固有名を記す箇所を挙げる[08]。

Div-Ps: tena khalu samayena rājagṛhe nagare ṣaṭ pūraṇādyāḥ śāstāro 'sarvajñāḥ sarvajñamāninaḥ prativasanti sma tadyathā pūraṇaḥ kāśyapo maskarī gośālīputraḥ saṃjayī vairaṭṭīputro 'jitaḥ keśakambalaḥ kakudaḥ kātyāyano nirgrantho jñātiputraḥ / (p. 143, ll. 10-13)
その時，都市ラージャグリハには一切智者に非ずして一切智者という思い上がりを有する，プーラナを初めとする六人の指導者たちが住んでいた。すなわち，プーラナ・カーシュヤパ，マスカリン・ゴーシャーリー

プトラ，サンジャイン・ヴァイラッティープトラ，アジタ・ケーシャカンバラ，カクダ・カーティヤーヤナ，ニルグランタ・ジュニャーティプトラである。

《② 「七日後」の開催》

【A】では「舎利弗」が七日後開催を指示する理由が明示されていた。これに対し，「起精舎品」では七日後に開催する理由が記されず，さらに，「六師」が七日後開催を人々に告げる点で相違していた。【B】には「起精舎品」と同じく「六師」が七日後開催を決めたとする資料がある（『賢愚経』「降六師品」：以下，「降六師品」と略す）。

「降六師品」：六師言曰。期後七日。願王平治講試之場。(T. 4, p. 361b19-20)

その一方で，【B】の『法句譬喩経』[09]，*'Dul ba phran tshegs kyi gshi*（以下，Tib雑事と略す）及び『根本説一切有部毘奈耶雑事』（以下，漢訳雑事と略す），そしてDiv-Psでは，釈尊が七日後開催を決めたとする。

Div-Ps: atha bhagavata etad abhavat, avaśyakaraṇīyam etat tathāgateneti viditvā rājānaṃ prasenajitaṃ kauśalam āmantrayate / gaccha tvaṃ mahārāja itaḥ sapatame divase tathāgato mahājanapratyakṣam uttate manuṣyadharme riddhiprātihāryaṃ vidarśayiṣyati hitāya prāṇinām / (p. 150, ll. 26-30)
その時，世尊は以下のように考えた。「これは如来による必須の責務である」と。〔そのように〕知って，コーサラ国王プラセーナジットに告げた。「大王よ，あなたは行くがよい。今日より七日目に，生類に対する利益のために，如来は大衆の面前で，上人法神通神変を示現するであろう。」

Tib雑事: bcom ldan 'das kyis sngon gyi yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas rnams kyi tshe 'phrul chen po gang du bstan ces dgons na mnyan yod du yin par gzigs so / / yang skye bo'i tshogs chen pos dus ji tsam na khong du chud par 'gyur zhes dgongs na zhag bdun lon nas 'gyur bar mkhyen nas ko sa la'i rgyal po gsal rgyal la 'di skad ces bka' stsal to // ... rgyal po chen po zhag bdun na 'o / (P40a7-b1; D42b7-43a2)[20]

世尊は「過去の正等覚者たちの時代，偉大な神変はどこにおいて示現されたか」と考えた。〔そして〕「舎衛城においてである」と知った。さらに，「人々の大集団がいつ集まるか」と考え，七日に至って後であることを知ったので，コーサラ王プラセーナジットに以下のようにを語った。「... 大王よ。七日目においてである」と。

《③ 協力者探索》

【A】では，舎利弗が闘いに備えて協力者を探索していると推測した外道たちが，自分たちの味方を探そうとする。結果，ラクタークシャ（あるいは勞度差）を見出し，味方に引き入れる。しかし，「起精舎品」ではその経緯は一切示されず，勞度差を見出したことを簡潔に記述するのみである。

この項目については，【B】の中の有部系の資料（Div-Ps，Tib-漢訳雑事）は「起精舎品」ではなく，【A】との類似性をよく示す。【A】で出てきた外道たちが協力者を探索をする場面が【B】のDiv-PsとTib-漢訳雑事にも見出せる。以下，前節③で引用したŚĀvの文章とほぼ一致する箇所には下線を付した。

Div-Ps: atha tīrthyānām etad abhavat / kiṃ punaḥ śramaṇo gautamaḥ saptabhir divasair anadhigatam adhigamiṣyati, atha vā niṣpalāyiṣyati, atha vā pakṣaparyeṣaṇaṃ kartukāmaḥ / teṣām etad abhavat / na hy eva śramaṇo gautamo niṣpalāyiṣyati nāpy anad-

higatam adhigamiṣyati nūnaṃ śramaṇo gautamaḥ pakṣaparyeṣaṇaṃ kartukāmo vayam api tāvat pakṣaparyeṣaṇaṃ kariṣyāma iti viditvā ... (p. 151, ll. 19-25)

さて，異教徒たちは以下のように考えた。「沙門ガウタマは，七日の内に，未だ獲得していなかったものを獲得しようとするのか。あるいは，逃げようとしているのか，あるいは，味方を求めようとするのか。」彼らは以下のように考えた。「沙門ガウタマは逃げようとしているのでもなければ，獲得していなかったものを獲得しようとするのでもない。きっと，沙門ガウタマは味方を探そうとしている。私たちも，その間，味方を探そう。」と考えて，...

Tib雑事: mu stegs can rnams kyis bgros pa / shes ldan dag yang na ni dge slong gau ta ma 'bros par 'gyur ro // yang na ni grogs tshol bar 'gyur na de la ji ltar bsgrub de dag 'di skad ces kye dge sbyong gau ta ma ni gdon mi za bar grogs tshol bar 'byung bas ji ste da ltar gyur na bdag cag gis kyang 'grogs ba btsal lo ... (P40b2-4; D43a3-4)[21]

異教徒たちは話し合った。「賢者たちよ，あるいは比丘ガウタマは逃げようとしているか，あるいは味方を探しているのだ。それに対してどうするか」〔と。〕彼らは以下のように語りあった。「ああ沙門ガウタマは間違いなく味方を探し始めるのだから，何を今なすかと言えば，私たちも味方を探そう。」

さらに，【A】と「起精舎品」の主人公の一人であり，舎利弗と術比べをするラクタークシャ（勞度差）と同名の人物が，【B】のDiv-Ps (p. 151, ll. 25-26) に登場する。しかし，Div-Psと内容的に殆ど一致するTib-漢訳雑事の当該箇所にはこの人物は登場しない[22]。また，Div-Psにおけるラクタークシャは，【A】のように闘争に参加することはなく，他の異教徒（五百人の仙人・スバドラ）を勧誘する役割を担うだけである。

Div-Ps: ... raktākṣo nāma parivrājaka indrajālābhijñaḥ sa āhūtaḥ / raktākṣasya parivrājakasyaitat prakaraṇaṃ vistareṇārocayanty evaṃ cāhuḥ / yat khalu raktākṣa jānīyāḥ śramaṇo gautamo 'smābhiriddhyā āhūtaḥ / sa kathayati / itaḥ saptame divasa uttare manuṣyadharme riddhiprātihāryaṃ vidarśayiṣyāmīti / nūnaṃ śramaṇo gautamaḥ pakṣaparyeṣaṇaṃ kartukāmas tvam api tāvat sabrahmacāriṇāṃ pakṣaparyeṣaṇaṃ kuruṣva / tena tatheti pratijñātam / ... (p. 151, l. 25- p. 152, l. 4)

幻術に精通した，かのラクタークシャという名の托鉢行者が呼び寄せられた。〔異教徒たちは〕托鉢行者ラクタークシャに対して，この出来事を仔細に告げて，以下のように語った。「実にラクタークシャよ，お聞きなさい。沙門ガウタマが，神通力に関して，我々により呼び寄せられた。彼（ガウタマ）は語った。『今日より七日目に，上人法神通神変を示現するであろう』と。きっと沙門ガウタマは味方の探索を行おうとしている。あなたも，その間，同じ梵行者に対する味方の探索を行ってくれ。」彼（ラクタークシャ）は「そのようにしよう」と約束した。

《④ 神通力対決の内容》

【A】では四戦，「起精舎品」は六戦を記す。すなわち，下記の二戦（第3戦と第5戦）だけが「起精舎品」にだけ見られる要素である。

●第3戦： 山 — 金剛力士
●第5戦： 牛 — 師子王

一方，この二戦において示現される内の幾つかが，「舎衛城神変」を記す【B】の内に，釈尊や加勢に現れる者たちが示現するものとして見出される。完全に一致するわけではないが，これらの点も，「起精舎品」の要素と【B】の要素との間の影響関係を予想させる。

『法句譬喩経』[23]：金剛力士

「降六師品」[24]：宝山／金剛密跡

Tib-漢訳雑事：金剛手[25]

《⑤ 舍利弗の神変》

【A】に見られず「起精舍品」のみに見られるものとして，舍利弗が勢度差に勝利した直後に神変を示すことが挙げられる。この記述の幾つかの要素も資料群【B】の内の釈尊による神変に見出せる。なお，「起精舍品」内の当該箇所を再度引用するが，資料群【B】に合致する箇所が見出せた部分には下線が引いてある。

「起精舍品」：時舍利弗。身昇虚空。現四威儀。行住坐臥。身上出水。身下出火。東沒西踊。西沒東踊。北沒南踊。南沒北踊。或現大身。滿虚空中。而復現小。或分一身。作百千萬億身。還合為一身。於虚空中。忽然在地。履地如水。履水如地。作是變已。還攝神足。坐其本座。(T. 4, p. 420c14-20)

【B】「法句譬喩経」：於是世尊即於座上 霍然不現。即昇虚空奮大光明。東沒西現四方亦爾。身出水火上下交易。坐臥空中十二變化。沒身不現還在座上。天龍鬼神華香供養。讃善之聲震動天地。(T. 4, pp. 598c24-599a3)

【B】『四分律』：於第十一日。世尊於大衆中現神足變化。一身為多身多身為一身於近現處若遠不見處若近山障石壁身過無閡。遊行空中如鳥飛翔。出沒於地猶若水波。履水而行如地遊歩。身出煙焔猶若大火。手捫摸日月身至梵天。(T. 22, p. 949c23-29)

【B】「仏本行経」：諸佛光明　照曜十方　身或出水

如雲中雨　或復變現　水火俱出
滿虛空中　化現如是　時佛奮現
如是神變　至二十八　無結愛天（T. 4, p. 86b18-21）

さらに，Tib-漢訳雑事とDiv-Psは，如来の弟子に共通する神通力として釈尊が下記のことを述べたとし，その内容は「起精舎品」における舎利弗の神変と下線部において一致する。

Div-Ps: ❶東方の空中に昇り四威儀の姿勢をとる。❷火界定に入り六色の光を放つ。❸身体の下から火焔を上からは水流を出す。❹四方位において以上のような四種を行う。(Div-Ps. p. 161, ll. 1-11)[20]

また，同じく【B】の*Dhammapada-Aṭṭhakathā*（以下，Dhp-aと略す）にも類似する表現が見出せる。

Dhp-a: 上半身と下半身から交互に火と水が出る。身体の前面と背面から交互に火と水が出る。左右の眼・耳・鼻・肩・手・脇・足・手足の指とその指の間から，全ての毛穴から火と水が〔交互に〕出る。それら（火と水）は六種の光（青・黄・赤・白・紅・輝き）を持つ。仏が歩行すると，化身は住するか，坐すか，臥す。…中略… 化身が臥すと，世尊は歩行するか，住するか，坐す。(Dhp-a, p. 213, l. 16- p. 214, l. 20)

但し，同じ『賢愚経』の「降六師品」には，「佛自化身高至梵天」（T. 4, p. 363a16-17）として大身になったことを記し，「起精舎品」の「或現大身」と対応する可能性もあるが，それ以外には一致点を見出せず，「起精舎品」と「降六師品」の記述との直接的な繋がりの薄さを示す。

結

外道たちと舎利弗の闘いを記す『賢愚経』「須達起精舎品」には，同じ説話を記すインド成立の可能性が高い有部律群・『衆許摩訶帝経』（＝【A】）とは異なる記述が存在している。それら相違点を，同じく舎衛城を舞台にした外道調伏譚「舎衛城神変」からの影響と考えることはできないか，その可能性を探った。結果，「須達起精舎品」と「舎衛城神変」資料の間には，記述の一致や類似するものが複数含まれていた。ここから，『賢愚経』「須達起精舎品」が，「舎衛城神変」からの影響を受けている可能性が出てきた。もちろん，「須達起精舎品」に見られる特色が，同じく『賢愚経』において「舎衛城神変」を記す「降六師品」とは完全に合致するとは言い難いため，『賢愚経』編纂時点での相互影響というより，それ以前の段階の影響関係を想定すべきであろう。そのことは，インド成立の「舎利弗の外道調伏譚」に，既に「舎衛城神変」との共通要素が見出せる点からも想定できる。インドにおける両話の影響関係についてさらなる検討が必要である。

【付記】本稿は平成24-25年度科学研究費補助金（若手研究（B）「インドにおける釈迦の一代記を描く仏伝と図像の比較研究」）を受けた研究成果の一部である。

註及び文献

《略号一覧》

D: Taipei (Sde-dge) Edition
Dhp-a: *Dhammapada-Aṭṭhakathā*
Div: *Divyāvadāna*
Div-Ps: *Divyāvadāna*. chap. 12. Prātihāryasūtra
ŚĀv: *Śayanāsanavastu*
SBhv: *Saṅghabhedavastu*
T: 『大正新脩大蔵経』

Tib雑事: *'Dul ba phran tshegs kyi gshi*
P : Peking Edition
漢訳雑事：『根本説一切有部毘奈耶雑事』
「起精舎品」：『賢愚経』「須達起精舎品」
「降六師品」：『賢愚経』「降六師品」
『衆許』：『衆許摩訶帝経』
『破僧事』：『根本説一切有部毘奈耶破僧事』

註

(1) 舎利弗についての研究としては，1954年に発表されたA. Migot氏による"Un grand disciple du Buddha: Śāriputra" (*Bulletin de l'École Française d' Extrême-Orient* 46) をはじめ，中村元氏の『仏弟子の生涯』(東京: 春秋社, 1991年)，最近ではL. Ray氏による*Buddhist Saints in India* (Oxford-New York: Oxford University Press, 1994) などが存在する。また，最近では岩田朋子氏も舎利弗と給孤独長者の関係を記す資料について検討を行っている(「舎利弗と給孤独長者」『印度学仏教学研究』第56巻第2号, pp. 212-217)。

(2) 【A】に属する四資料は，いずれも「根本説一切有部」を冠する律文献それ自体か，あるいはそれと深く関係する文献であることも留意すべきであろう。

(3) 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(以下，『破僧事』と略す) の当該箇所では「到已便作是言。長者。汝不應為喬答摩沙門造立寺舍。何以故。我等先已分界。彼王舍城可喬答摩居止。此室羅筏城而我等住。是故不應造寺。」(T. 24, p. 140a) とされる。また，『衆許摩訶帝経』(以下，『衆許』と略す) の当該箇所では「謂長者曰。瞿曇沙門今在摩竭陀國王舍城居。此舍衛城地貴名高非彼所住。勿立精舍勿得迎請。」(T. 3, p. 967b) とされる。

(4) tīvradveṣaparyākulīkṛtamanasas tīrthyās te saṃbhūya yenānāthapiṇḍado gṛhapatis tenopasaṅkrāntāḥ; upasaṅkramya kathayanti: mā tvaṃ gṛhapate śramaṇasya gautamasya arthāyātra vihāraṃ karāya; kiṃ kāraṇam? asmābhir nagarāṇi bhājitāni; śramaṇasya gautamasya rājagṛham; asmākaṃ śrāvastī (ŚĀv. p. 20, ll. 15-20) 以下，ŚĀvの翻訳にあたっては，次の研究を参考にした。岩田朋子「出家者の修行場所: 『根本説一切有部毘奈耶臥坐具事』Śayanāsanavastu の和訳(1)」『インド学チベット学研究』15 (2011年), pp. 97-133; 〃「出家者の修行場所: 『根本説一切有部毘奈耶臥坐具事』Śayanāsanavastu の和訳(2)」『インド学チベット学研究』16 (2012年), pp. 88-123; Gregory Schopen, "Hierarchy and Housing in a Buddhist Monastic Code: A Translation of the Sanskrit Text of the *Śayanāsanavastu* of the *Mūlasarvāstivāda-vinaya* —Part One [from the Sanskrit]" *Buddhist Literature*, Volume 2 (2000), pp. 92-196.

(5) sa kathayati: bhājitāni yuṣmābhir nagarāṇi, na tu madīyaṃ svāpateyam; yasyābhipretaṃ tasya dharmaskandhaṃ kārayāmīti (ŚĀv. p. 20, ll. 20-22)
また,『破僧事』の当該箇所は「長者報曰。汝等祇可分自國境。不應共分我園。我所造功德皆由自心。」(T. 24, p. 140a) と記し,『衆許』の当該箇所では「長者即怒報外道曰。此舍衛城非汝所有。何關汝事。」(T. 3, p. 967b) とする。dharmaskandha の訳にあたっては, 上記註(4)の Schopen 氏の論文における指摘 (p. 176, note IX. 6) を参照した。

(6) te rājñaḥ sakāśaṃ gatāḥ; tatrāpy anāthapiṇḍadena parājitāḥ (ŚĀv. p. 20, ll. 22-23)

(7)『破僧事』では「與我等共相論議。若能勝我隨意造寺。」と下線部のように訳される。同じ【A】の『衆許』も「…可與論義即辯勝劣。如彼得勝精舍可為。」(T. 3, p. 967b) とする。「起精舍品」では「術比べ」とされている。外道からの陳情を受けた王が, 給孤独長者を呼び寄せて告げる。「今此六師云。卿買祇陀園。欲為瞿曇沙門起立精舍。共沙門弟子挍其伎術。若得勝者。得立精舍不如。便不得起。」(T. 4, p. 420a)

(8) dhvāṅkṣās tīrthyā avikṛtavadanāḥ kathayanti: gṛhapate na te kāmakāram anuprayacchāmaḥ; śramaṇasya gautamasyāgraśrāvakaḥ āgataḥ; sa yady asmān vādena parājayate, kāraya vihāram iti (ŚĀv. p. 20, ll. 23-26; SBhv. p. 173, ll.16-19)

(9)『賢愚経』「須達起精舍品」に影響を受けたとされる「降魔変文」(秋山光和『平安時代世俗画の研究』p. 429), そして, 同じく敦煌変文ではあるが『賢愚経』とは若干内容を異にする「祇園因由記」にも同じ文脈の中で, 舍利弗の対立者として「六師」の語を見出し得る (王重民校録『敦煌変文集』(上集, 北京: 1957年) p. 372, l. 16, p. 407, l. 14)。

(10) ŚĀv: āyuṣmān śāriputraḥ saṃlakṣayati: kim eṣāṃ santi kānicit kuśalamūlāni uta na santīti; paśyati, santi; kasyāntike pratibaddhāni; mamaiva; punaḥ saṃlakṣayati: kim etāvanta eva mama pratibaddhā vineyā āhosvid anye'pi vādena vineyāḥ santīti; paśyati, santi (ŚĀv. p. 20, ll. 33-37; SBhv. p. 173, ll. 26-30)

具寿シャーリプトラは「これらの者たちには善根はあるのか, それとも無いのだろうか」と考えた。彼は「存在する」と知った。〔また,〕「誰のもとに結ばれているのか」〔と考え,〕「他ならぬ私のもとにである」〔と知った〕。さらに「この者たちだけが私により導かれるべきものとして結ばれているのか, それとも, 他にも争いによって導かれるべき者たちがいるのか」と考えた。彼は「存在する」と知った。

『破僧事』: 又復觀察。幾時應來集會。觀見根器。卻後七日可能集會。作觀察已告長者曰。可隨汝意。卻後七日我當論議。(T. 24, p. 140b)

(11) 『衆許』：尊者於是入定觀察。諸外道輩及舍衛國人。根緣成熟有幾時分。見彼人衆唯餘七日。尊者出定告長者曰。請語外道。過七日已可來論義。(T. 3, p. 967c)

(12) kiyaccireṇa sannipatiṣyanti; paśyati, saptāhasyātyayād iti; samanvāhṛtya kathayati: gṛhapate evaṃ bhavatu; kiṃ tu saptame divase (ŚĀv. p. 20, l. 37 - p. 21, l. 2; SBhv. p. 173, ll. 30-32)

(13) 『衆許』：由是諸處親自訪尋乃得一人。名赤眼婆羅門。而告之曰。彼瞿曇沙門有大弟子索我論義。汝婆羅門應宜相助。何以故。若自得勝利養猶存。彼或勝時我等何往。彼即問言。何時論義。報曰。後當七日至時相報必來助汝。(T. 3, p. 967c) 一方、『破僧事』は赤眼が「善能幻化」(T. 24, p. 140b13) だとするが、それ以外はほぼ同様。

(14) 『破僧事』：彼外道衆聞斯語已。共相謂曰。有二種因緣。何以為二。者舍利子必應逃走。二者應覓伴侶以此之緣延期七日。外道復相謂曰。等亦可覓當宗知友 (T. 24, p. 140b)

『衆許』：外道思惟。立七日限斯有二事。者知已非勝設計私逃。二者或求本朋來共商攝如是思已。今云何不求朋侶 (T. 3, p. 967c)

(15) サンスクリット文献で原語を確認すると次の通り。第1戦：supuṣpitaḥ sahakārapādapo (みごとに花の咲いたマンゴー樹) 対 tumulo vātavarṣa (暴風雨)。第2戦：padminī (蓮池) 対 kalabhahastī (若々しい象)。第3戦：saptaśīrṣo nāgo (七つの頭を持つナーガ) 対 garuḍo (ガルダ)。第4戦：vetāḍa (屍鬼) 対 mantraiḥ (マントラ)。

(16) 「舍衛城神変」説話を検討するに際しては、図像学の研究成果までを含む研究史を纏めた次の研究が存在するので、これを参照した。cf. 宮治昭「「舍衛城神変」と大乗仏教美術の起源：研究史と展望」『美学美術史研究論集』第20号 (2002年)、pp. 1- 27.

(17) 「世尊は (bhagavān) は、…舍衛城における (śrāvastyāṃ) ジェータヴァナ (Jetavane) すなわち給孤独の僧園に (anāthapiṇḍadasyārāme) 逗留した (viharati)。」(*Divyāvadāna*, edited by Cowell and Neil, 1886, p. 148, ll. 7-27) 以下、*Divyāvadāna*に含まれる第12章 Prātihāryasūtraの和訳に際しては下記の研究を参照した。cf. 宮治昭「Divyāvadāna 第12章 "Prātihāryasūtra" 和訳」『文化紀要』第13号 (1979年)、pp. 117-141; 平岡聡『ブッダが謎解く三世の物語』東京：大蔵出版、2007年、pp. 265-301.

(18) 【B】の内、固有名詞を持つ「六師外道」を記す箇所は下記。『四分律』[T. 22, p. 949b26-29] ;『仏本行経』[T. 4, p. 84c9-11] ;『賢愚経』[T. 4, p. 360c29] ;『法句譬喩経』[T. 4, p. 598c2-9]

(19) 『法句譬喩経』：佛言大住。結期七日當拘變化。(T. 4, p. 598c).

(20) 漢訳雑事：爾時世尊復作是念。古昔諸佛皆於何處現大神通。見在室羅伐城。

復念何時大衆雲集。見七日後。如是知已告勝光王曰。王今應去觀機應會我當作之。王曰。欲在何時。佛言。待七日後。(T. 24, p. 330a).

(21) 漢訳雑事：外道聞已展轉共議。沙門喬答摩。或可逃竄。或覓己朋。我等諸人欲何所作。共相議曰。沙門必定求覓己朋。我等亦可覓相知者。(T. 24, p. 330a)

(22) 平岡聡氏もこの点を指摘している。cf. 平岡聡『ブッダが謎解く三世の物語』(東京: 大蔵出版, 2007年) p. 293, note 24.

(23) 『法句譬喩経』：於是金剛力士舉金剛杵。杵頭火出以擬迦葉。何以不現卿變化乎。(T. 4, p. 599a)

(24) 「降六師品」(宝山：p. 362b20; 金剛密跡：p. 363a6) 内容は『四分律』と類似。

(25) 時金剛手大藥叉主作如是念。此六癡物久惱世尊。須作方便令其改往。更不敢然悉皆逃竄。作是念已即放猛風雨雹交注。彼神通舍隨處崩摧 (T. 24, p. 332c)

(26) atha bhagavāṃs tadrūpaṃ samādhiṃ samāpanno yathā samāhite citte svasminn āsane 'ntarhitaḥ pūrvasyāṃ diśy uparivihāyasam abhyudgamya ❶caturvidham īryāpathaṃ kalpayati tadyathā caṅkramyate tiṣṭhati niṣīdati śayyāṃ kalpayati / ❷tejodhātum api saṃpadyate / tejodhātusamāpannasya buddhasya bhagavato vividhāny arcīṃṣi kāyān niścaranti tadyathā nīlapītāni lohitāny avadātāni māñjiṣṭhāni sphaṭikavarṇāni / anekāny api prātihāryāṇi nidarśayati / ❸adhaḥ kāyaṃ prajvālayaty uparimāt kāyāc chītalā vāridhārāḥ syandante / ❹yathā pūrvasyāṃ diśy evaṃ dakṣiṇasyāṃ diśīti caturdiśaṃ caturvidham ṛddhiprātihāryaṃ vidarśya tān ṛddhyabhisaṃskārān pratiprasrabhya prajñapta evāsane niṣaṇṇaḥ / (Div-Ps. p. 161, ll. 1-11); Tib-漢訳雑事: de nas bcom ldan 'das kyis ji ltar thugs mnyam par bzhag na nyid kyi gdan las mi snang bar gyur nas / ❶shar phyogs kyi steng gi nam mkha' la mngon par 'phags te spyod lam bzhi po 'di lta ste / gshegs pa dang / 'greng ba dang / bzhugs pa dang / gzims pa mdzad par 'gyur ba de lta bu'i ting nge 'dzin la snyoms par zhugs so // ❷me'i khams la snyoms par zhugs te sangs rgyas bcom ldan 'das me'i khams la snyoms par zhugs pa'i sku las 'od zer sna tshogs 'di lta ste / sngon po dang / ser po dang / dmar po dang / dkar po dang / btsod ka dang / shel gyi kha dog lta bu dag 'thon(P. mthon) to / ❸zung gi cho 'phrul sku'i smad nas ni me 'bar / sku'i stod nas ni chu grang mo'i rgyun 'bab pa dang / sku'i stod ni me 'bar / sku'i smad nas ni chu grang mo'i rgyun 'bab pa dag kyang ston par mdzad do / / shar phyogs su ji lta bar lho dang / nub dang / byang phyogs su yang de dang 'dra(P. 'du) ste / ❹phyogs bzhir rdzu 'phrul gyi cho 'phrul rnam pa bzhi bstan nas rdzu 'phrul mngon par 'du mdzad pa btang ste seng ge'i khri la bzhugs so / / (P47a5-b1; D49b7-50a4) ; 爾時世尊便入如是勝三摩地。便於座上隱而不現。❶即於東方虛

空中出。現四威儀行立坐臥。❷入火光定出種種光。所謂青黄赤白及以紅色。❸身下出火身上出水。身上出火身下出水。❹如於東方南西北方亦復如是現其神變。既現變已即還收攝。於師子座依舊而坐。(T. 24, p. 332a)

キーワード　外道，舍利弗，祇園精舍，給孤独，舍衛城神変